



# 特集 — 読解力を考える

— 昨年12月に発表されたPISA学力調査で注目を浴びた「読解力」。これまでの国語教育に何が足りなかったのか、今できることは何か。今回の特集として取り上げました。

## 国語力と読解力

前国立国語研究所所長

甲斐 睦朗

での国語科用語「読解」から、これは国語教育の責任だと受け取られ、日本が中位に転落した結果が一人歩きして日本を震撼させたのである。

本稿は、PISAの読解力調査がどのようなものであり、今後どのように対処するべきか、具体的に解説する。

### 1 やつめじ

PISA二〇〇三年の読解力調査で日本の読解力が二〇〇〇年の八位から十四位に転落した。二〇〇〇年の八位は一位との有意な差がなかったが、二〇〇三年の十四位はトップとの有意的な差があつて、全参加国の平均ではないといつたことであつた。この結果が公表されると、教育界は当然としてさまざまな分野で嘆き、怒り、非難などの発言が飛び交つた。

しかし、当時、PISAの読解力調査がどういつ内容であるかについてはほとんど知られていなかった。これま

### 2 OECDのPISA調査とは

OECDは、経済協力開発機構 (Organization for Economic Cooperation and Development) の略称で、先進工業国を中心とした三〇か国ほどで経済に関する国際協力に取り組む機構である。

教育についても、「生徒の学習到達度調査」(PISA: Programme for International Student Assessment) などに取り組んでいる。これは、各国の義務教育修了段階の十五歳の生徒が、将来生活していく上で必要とされる知識や技能がどの程度身につけているかを測定する目的で取り組まれ、調査は三年ごとに実施される。

次に、「読解力」は「Reading Literacy (リーディング・リテラシー)」の訳語で、日本で長年使ってきた「読解」や「読解力」とは異なる概念の用語である。その説明の訳文を引用したい。

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。この「読解力」には、次の三つの側面がある。これも引用しておく。

情報の取り出し テキストに書かれている情報を正確に取り出すこと。

解釈 書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり、推論したりすること。

熟考・評価 テキストに書かれていることを知識や考え方、経験と結び付けること。

まず、「情報の取り出し」における「テキスト」には、解説、記述、物語のよつな「連続型テキスト」、書式、表、図、図・グラフ、地図など視覚的に表

現した「非連続型テキスト」がある。それらは、テキストの用途によって教育的、職業的、公的、私的なものに分けることができる。そして、内容の引き出しだけでなく、文章の構成や表現法なども評価の対象となる。

次の「解釈」は、書かれた情報から推論して意味を理解する力が問われる。この「推論」が大切である。そして、最後の「熟考・評価」は、テキストを利用したり、自分の意見を述べたりする力が問われている。なお、PISAの読解力では「テキスト」という用語が重要な意味をもっている。これまでの国語科の学力調査では「文章」とか「本文」などとよんでいたものである。

ところが、PISAの読解力調査では、言葉で表現された本文以外に、視覚に訴える映像(地図、グラフ、一覧表、絵、写真など)が本文と同等に扱われている。それらを相互に関係づけた読み取りが大切になる。そこで、これらの映像を含めて「テキスト」とよ

んでいるわけである。「資料」の意味である。

また、調査問題の出題形式は、自由記述、多肢選択、求答(答えが問題のある部分に含まれている)、短答(短い語句、数値で答える)の四種に整理される。の「自由記述」は、答えとその答えを導いた考え方や求め方、理由などを説明する問題である。

### 3 国語科で育成する国語力とPISAの読解力の違い

PISAの読解力(リーディング・リテラシー)は、前項で紹介したように、複数のテキスト(立場や見解が異なつたり、種類が異なつたりする複数の資料)を読み比べて、適切な根拠を示して自分の判断を論理的に表現する能力を中心としている。

国語科の説明文教材の学習指導は、写真、グラフ、地図などを組み入れた学習にも取り組んできたものの、写真

はともかく、グラフや地図などを本文と同等に扱う学習は十分に展開されず、文章表現の読み取りに中心が置かれがちであった。

さて、国語科で育成する国語力とPISAの読解力であるが、それらはかなりの重なりをもつ二つの円としてとらえることができる。その図は、大きく次の三領域に分けられる。

(1) 国語力だけに認められる能力

まず、(1)は、日本の言語文化に係る能力、また、文字表記に係る能力などである。世界共通の読解力では、日本の漢字・語彙、それらに直結する発想や思考の問題、日本古典に係る問題などは除外される。

ところが、国語力を支える語彙力は漢字を用いた(音訓による)熟語である。語彙は思考力を支えることにもなる。日本古典は翻訳すれば別であるが、それでは言葉のもつ意味の大部分が欠落するし、リズムも失われることになる。日本の文学作品もまた、古典と同じく、日本語で読むことによって得ら

れるところが小さくない。  
文字を書くこと、本文を声に出して読むことは(1)の内容・能力を高める上で大切なことである。

(2) 国語力と読解力に共通する内容・能力

次にPISAの読解力の中心は、本文を読んで自ら問題を発見し、自らその解決に立ち向かい、自分の言葉でその考えを言い表す能力である。この能力の育成は、現行の学習指導要領の国語科が眼目としていっているところでもある。両者の意図するところに食い違いがあるわけではない。

それでは、PISAの読解力における「テキスト」の概念が、国語力のそれとは違うのではないかと疑問が出てくるかもしれない。しかし、「読解」を「読む」という用語に言い換えてみると、「顔色を読む」「地形を読む」などという使い方をしている。非連続型の「テキスト」を連続型の本文と同列に「読む」習慣がなかったことは事実であるが、これは、少し拡張をすれば

すぐに習得できる能力である。

(3) 読解力だけに認められる能力

最後の(3)は、国語科で育成する国語力になくて、PISAの読解力だけにある能力である。これは、次の二つに分けて考えることができる。その第一は、「総合的な学習の時間」で獲得できる能力で、国語科の授業だけでは難しい能力は何かを考えると導かれてくる。すなわち、他教科の協力によって習得させるべき知識・情報、また、複数の教科を複合させることによって初めて可能になる知識・情報である。

国語科だけでは十分でない能力を育成するには、複合教育的な指導が必要である。そこで、現行の学習指導要領を改めるのでなくて、いっそう徹底させた指導に踏み切らなければならない。他方、幅広い読書活動を推進し、他領域の図書を数多く読ませる必要もある。

第二は、すでに(2)で取り上げたことに関係するが、「自分の力で問題を発見し、その問題について自分で考え、その導き得た結論を自分の言葉で説明

する」という、まさに国語力の根幹となる能力の育成の問題である。これは、すでに指摘したように現行の学習指導要領の根本的な考えである。ところが、教室における指導がいわゆる「一問一答」型の授業展開から脱却できていないということがある。

「一問一答」型の授業から、学習者の主体性を大切にした授業への転換を試み、解決を図る必要があるわけである。

#### 4 PISAの読解力を育成するための方策

文部科学省は、こうした読解力を育成するために、平成十七年十二月に『読解力向上に関する指導資料』PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向』をまとめた。以下、本報告書の「改善の具体的な方向」で取り上げられている三項目の方策を、「前置き」とともに紹介する。

教科国語を中心としつつ、各教科、総合的な学習の時間等を通じて、次

のような方向で、改善の取組を行う必要がある。

テキストを理解・評価しながら読む力を高めること

テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること

様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること。

まず、「前置き」であるが、国語科で基礎・基本的な能力を付与する、他教科で教科に即した形の指導を加える、総合的な学習の時間で全体のまとめとしての学習に取り組むという関係が示されている。

特に、とで取り上げられている「書く」能力の育成について説明を加えておきたい。というのは、このPISA調査(読解力)の、自由記述の調査で、白紙回答が多かったからである。白紙回答の問題は、学習者の主体的な判断を尊重することによって解消に向かうことができる。すなわち、理由や根拠などを伴った自分の考えを論理的にまとめる能

力が問われているわけである。

『読解力向上に関する指導資料』は「読解力を高める指導例」として四十五例を、縦に対象学年七段階、横に「指導のねらい」七種で組み合わせた一覧表にまとめて、その上で、四十五例それぞれ取り扱い方について簡単に紹介している。

PISAの読解力でも日本の成績が優秀で、しかも、日本の言語文化に支えられた国語力をきちんと身につける児童生徒の育成こそが大切である。

本稿をまとめる上で、次の二冊の報告書を用いた。

『生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査』PISA(二〇〇〇年調査国際結果報告書)

国立教育政策研究所編(ぎょうせい)

『読解力向上に関する指導資料』PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向』

文部科学省